1957年12月　天　気　Vol. 4 No. 12

日本気象学会創立75周年記念式における理事長式辞

本日ここに75周年記念式を計画しました所，来賓各位の御臨席を得，また会員多数相会して，盛大にこれを挙行出来ますことは，まことにうれしいことであります．

日本気象学会は明治15年（1882年）に創立されました，ですから今年で満75年になります．

記念事業としては

記念論文集（和文及び欧文）の出版
日本気象学会史の出版
記念講演会の開催
記念式及び祝賀会の挙行

を計画いたしました．論文集及び学会史は本日お配りすることを目標にしていましたが，まにあわず残念でした．記念論文集の欧文篇には外国の気象学者の寄稿が20数篇あります．これは我々の計画を外国に知らせて寄稿を勧誘したのですが，期間の余裕が十分ではなかったにもかかわらず，たちまちこれだけ集って編集委員をむしろ驚かせたのであります．

これらの国々の気象学会の会長に本日の式への招待状を出しましたところ，アメリカ気象学会会長のDr, R. D. Fletcherが，バンコックの太平洋学術会議に出席の途次とはいえ，ここに御列席頂いたことは，これまたこの上なくうれしいことであります．

講演会としては，7，8日には例年の通りの秋の大会を気象庁の構内でやり，今9日の朝から先程まではこの建物で綜合講演会（放射と超高層気象，雲の物理，数値予報）を行いました．これは内容はトップレベルのものでありますが，表現はずっとやさしく，専門外の人にも理解出来るようにという注文での新しい試みでありました．一般講演会は明後11日の午後第一生命ホールで，和達清夫博士と中谷宇吉郎博士の講演を予定しております．

これだけの記念事業をやりますには若干の資金がいります．会員の負担能力にも限界がありますので，外部の方々の御援助を仰ぎました．これに対し厚く御礼申上げます．

学会創立の1882年というのは第1回の Polar Year の年でありました．50年たって1932—33年に第2回の Polar Year が行われ，それから25年合計75年たって1957—58年すなわち本年は Geophysical Year が行われております．これは不思議な因縁であります．

明治維新後日本の国の仕事として東京の気象観測を行うようになったのは，明治8年6月1日であり，これは気象記念日として祝われております．また気象電報を始め，天気図を作り，暴風警報の仕事を始めたのは明治16年のことでありました．当時の測候所の数は日本本土に20カ所位のものでありましたが，毎日天気図を作る仕事をはじめたのは．アジア諸国の中では最初であったということです．

こういう背景の前で明治15年5月に“東京気象学会”が創立されました．創立当時の会員は全国でわずかに38名でありました．学会は機関誌として“気象集誌”を発行して会員に配布しました．この時の集誌は今のB6判に近いもので，毎号30数頁を刷っております．この頃の会長，幹事長には正戸豹之助，荒井郁之助，小林一知，和田雄治の名がみえます．

学会は明治21年に陣容を新たにして再発足しております．この時会の名を改めて“大日本気象学会”とし，学会の運営は会頭，幹事長，幹事数名でやっております．会頭には山田顕義，榎本武揚，

花房義質，中村精男，岡田武松の名が見えます．学会は昭和16年7月に社団法人となり，この機会に会名を改めて“日本気象学会”としました．役員は理事長，理事でやってゆくこととなり，従来会頭であった岡田博士が理事長に選ばれ，岡田博士退任の後和達博士が代られ，昭和28年12月から私が代っております．

気象集誌は最初B6判に近いものでありましたが，明治21年，第7年からはA5判となり，大正11年までが第1集で，大正12年（1923年）からはB5判横書きで第2集第1巻となり，今年は第2集第35巻ですが，全体では75年になるのであります．

この間明治44年8月には30年記念号，大正11年9月には40年記念号を出しております．また昭和6年には特に記念号を出すことはしませんでしたが，巻の扉に50年記念の文字を刷りこんでおります．上記の会頭，幹事長，幹事，理事長，理事等の役員として学会のために尽力された方々のほかに，編集委員その他として苦労された方も多いのでありますが，今日になっては容易にそれらの方々のお名前を調べ上げることが出来ません．わかった方の中には本日御列席頂いている方もあります．

歴史的なこととして次のことはつけ加えておかねばならぬ一つと思います．機関誌である“気象集誌”に掲載される論文の内容は，早い頃には気象のほかに地震，火山，海洋，地球電磁気等にわたり，地球物理学の全分野を含むものでありましたが，それぞれ専門の学会が出来るに従って，気象学会で取扱う論文は気象に限られるようになって来ました．

唯今述べましたことは気象庁（元の中央気象台）で扱う事業の分野が，上記のように広いものであるためにちがいないのでありますが，また同時に学会の会員の相当のパーセンテージが気象庁関係の職員であることも，ほかの学会には珍しい一つの特色かとも思います．これがために時として，気象学会は気象庁職員の同好会のようなものだという偏見をもたれる人があるのは残念なことです．

現在の会員の構成を見ますと，気象庁関係のほか各国立大学，公立大学，私立大学その他学校及び研究機関の方々を網羅し，近頃では防衛庁の気象関係の方々の入会の申込みも多いのであります．ほかの学会で時々見かけますような学界における派閥によって，会員にならないというようなことは一つもありません．少くとも日本の気象の学問については，我々の気象学会が中心になっているということは，確信をもって言えることだと思うのであります．

75年間の気象集誌をふりかえって，日本の気象学がどのように進んで来たかをここで申上げるのが，あるいは面白いのかも知れませんが，今は十分な時間もありませんから，それはすべて近く発行される“日本気象学史”にゆずり，ここでは日本の気象学というものが，世界でどの位の水準にあるかということを，一つの手近な例をとって申上げましょう．

自分の事を申して恐縮ですが，私は昨年の春北米アリゾナ州ツソンで催された“天気変形研究の科学的基礎会議”に出席いたしました．この時開会の最初にシカゴ大学のバイヤース教授が天気変形研究の歴史的概観を述べたのですが，その中で日本の学者の業績をあげ，また現在この方の仕事を活溌にやっている機関の名の中にも日本の何カ所かをちゃんとあげております．またその時最後にMITのホートン教授が会議を終っての感想というのを演説したのですが，その中でも雲物理の基礎的研究に関する日本の学者の業績を賞讃しました．これに類する例をあげればいくらもあることと思います．私は今の日本の気象学が世界で一流であると主張したいとは思いませんが，かなりレベルの高い所にあることは確かだと思います．

我々は天気図を見なれておりますので，多くの場合に国境を忘れがちであり，そのためにまた現在かなりの程度の国際協力をしているのだということすら忘れ勝ちであります．先頃地理の某教授とお会いした折に，気象庁の予報部では毎日北極を中心とした北半球の天気図を作っているのだということが話題に出，またよその国でもそれ位のことは大抵やっているのだということをいいました所，その国際協力の程度が高いのに痛く驚いておられました．しかし我々はこういう観測値の速報交換で国際協力が終ったものとは思いません．

近頃はヒマラヤ山脈やチベット高原が日本の梅雨に関係するというように大規模な見方も進んで来ました．南半球の豪州方面の高気圧の発達が台風の発生に影響することは前から言われていたことで

あります．これからの気象学を進めるにはそれぞれの地域性ということでの国際協力も必要ですし，研究方法の上での国際協力も必要です．

気象学者の取扱う問題は横の拡がりでは全地球面上に及ぶのでありますが，高さの方では Atmosphere の及ぶ限りの所が入るものと思います．この方面ではＩＧＹで色々の観測が行われつつあり，またすでにソ連は2個の人工衛星を飛ばせております．戦後のロケットによる観測で，いわゆる超高層気象は，いく分はっきりしてきたのでありましたが，今後は人工衛星による観測，あるいは人工衛星そのものの観測で，この方面にはまた劃期的な進歩がもたらされることでありましょう．私はほかの惑星の大気現象もやはり気象学者の研究を待っているものと思うのであります．気象学のそのほかの色々な分野についてみても，今やはっきりした進歩の段階がみえております．人によっては進歩の黄金時代にあるともいいます．

“古きよき時代”というのはよく聞く言葉でありますが，こう考えて参りますと，我々は我々の学会の75年の記念式に当って“新しきよき時代”の入口に立ったと考えてもいいのではないでしょうか．そしてまた我々各自がその学会の一員であったことを非常な幸運と考えてもよいのではないでしょうか．

これをもって私の式辞といたします．

1957年11月9日

日本気象学会理事長
畠　山　久　尙

日本気象学会創立75周年記念大会に寄せられた祝辞

文部大臣

本日ここに日本気象学会の創立75周年記念式典が挙行されるにあたり，お祝を申し述べることのできますのはわたくしの深くよろこびとするところであります．

顧みれば，この学会が，正戸豹之助氏らの主唱のもとに，東京気象学会としてはじめて結成されたのは，明治15年5月のことであります．当時，わが国における気象学は，まだ初歩の時期で，気象観測等の事業もようやく緒についたばかりであり，新しく発足したこの学会も，会員数わずかに38名にすぎなかったと聞いております．それ以来会員諸氏の努力によって会は年とともに発展し，現在では北海道，東北，関東，関西，九州の5地区に支部をもち，会員数約1,400名を数えるに至り，また事業の面においても，あるいは「気象集誌」「天気」「気象研究ノート」等，定期刊行物を発行し，あるいは国内及び国外の関係学会との協力を図るなど，活発な活動を展開して，気象学の研究を推進し，学術文化の発達に貢献して来たのでありまして，わが国気象学が，今日のように高い水準に達したのはこの学会の多年にわたる業績に負うところがはなはだ大きいのであります．

本年は学会の創立75周年に相当しますので，本日ここに盛大な式典の行われますことは，その意義まことに深く心からお祝を申し上げます．同時にまた幹部各位はじめ会員諸氏には，これまで学会の歩んで来たあとを回想して，さだめし感慨の深いものがおありのことと推察いたし，その御労苦に対して深厚の敬意を表する次第であります．

今や世界における学術の進歩は真にめざましく，これに伴って，人類生活にはほとんど革命的革新が行われつつあります．このときにあたり，人間の生活に最も関係の深い気象学の研究を使命とするこの学会の今後の活躍に期待するところはすこぶる大なるものがあります．わたくしは本日の記念式典に際し，ここに学会の輝かしい業績をたたえて，今日の隆盛をお祝い申しますとともに，関係の皆様の御努力によってこの学会がますます発展することを心からお祈りしてお祝のことばといたします．

昭和32年11月9日

文部大臣　松　永　　東（代読）

運輸大臣

菊花かおるこのよき日，ここに日本気象学会創立75周年の式典を挙行されるにあたり，一言所懐を述べる機会を得ましたことは，私の最も喜びとするところでありま